第３章　ジオパークを通した広域連携のあり方

四国には世界に誇れる多様な地質資源があり、それに影響される貴重な植生や生態系が存在する。また、人々は自然と共生する様々な知恵を生み出し、固有の生活様式が伝承され、四国の特徴のある歴史・文化・産業・暮らしが今に見られる。しかし、残念ながらこれまではこれらの地質資源はそういった視点で評価される機会が少なく、地域活性化の素材として十分活用されてこなかった。

四国においては、再度地域に目を向けて、まだまだ埋もれている資源を掘り起こし、それらを再評価し、ジオツーリズムなどの観光素材として活用することにより、都会にはない魅力がうまれ、交流人口の拡大、雇用の創出、若者の地元定着、伝統文化の継承、自然の保全保護など様々な相乗効果が期待される。

１　広域連携のテーマ

四国では吉野川の北岸に沿って中央構造線が佐田岬半島まで東西に走り、この構造線以北は、中生層・古生層と、これを貫く火成岩が分布している。構造線以南では、大陸プレートに海洋プレートが潜り込むときに、海底の堆積物が陸の端に付加している。これらの地層は、北から南にかけて年代順に形成され、「日本列島の生成の歴史」を連続的に見ることができる地質の宝庫である。

その地質に動植物が影響を受け、自然環境が形成され、その環境の中で、人々の暮らしや文化面においても各地域が様々な特徴を持つようになっている。

その代表例が、四国八十八箇所を巡る遍路文化である。この遍路文化が宗教的な巡礼により、みずからの内面を見つめようとするものならば、ジオパークの特徴的な地質を持つ各地域を巡ることは、今ある地形・地質の姿と人々の暮らし、歴史に触れ、感じ、人間そのものを大地の視点から見つめようとするものと考えられる。

このように、四国は、“自然と人とのつながり、人としての生き方、あるべき姿”を見つめることができる旅をテーマに、各地域が、特徴的な地質とそれに基づく歴史や文化を軸にまとまることで、広域連携できる可能性を秘めている。

お遍路の様子

≪参考≫

（高知新聞 2008 年 11 月 02 日付朝刊「視点」というコラム欄）より一部抜粋

日本ジオパーク委員長、前・京都大学総長　尾池和夫（地震学）

四国には地球科学を志す人たちが世界からよく訪れる。四国の北側には、秩父累（るい）帯北帯という地層がある。ジュラ紀中期からジュラ紀後期に、ユーラシア大陸の東の端へ、プレートの沈み込みで付加された地層である。その南側の地層は四万十帯と呼ばれる。白亜紀後期から第三紀までの新しい地層である。

四国の大地の地層は北から南へしだいに新しい年代である。四国の地質図は東西方向に伸びるさまざまな色の帯が並んで美しい。それらに、ジュラ紀、白亜紀、パレオジン、ネオジン、第四紀というような地質年代の名が古い順に付くのである。

海のプレートが大陸のプレートの下に沈み込むとき、陸のプレートの端がちょうどブルドーザーのような役目をして、海のプレートの上に乗ってきた堆積（たいせき）物をはぎ取り、それらを陸の端にくっつけていく。そのようにしてできた地層を付加体と呼ぶ。日本列島のかなりの部分がこの付加体からなっている。

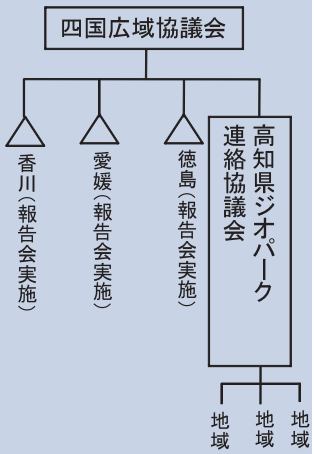
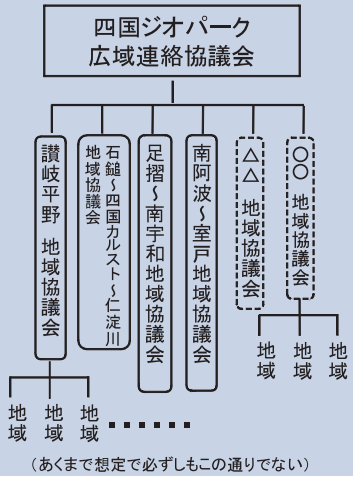
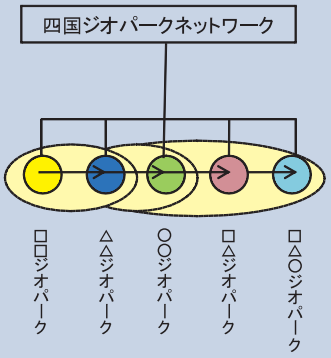
（中略）

中央構造線から南側の西南日本外帯には岬が並ぶ。御前崎、潮岬、室戸岬、足摺岬で、それらに海成段丘が発達している。ゆるやかに海に向かって傾斜する海底が、海水面の変動と地殻変動とで離水した台地状の地形である。海成段丘は現在に近い時代に、その地域が継続して隆起運動をしていることを示している。

2　運営組織について

以下は、今後の組織のあり方について示したものである。表中、移行期にある地域協議会の名称や、地域の設定については本調査のモデル地域調査を踏まえたものであり、実際の活動実績を直接、反映したものではない。

ア　組織運営のあり方と役割分担

	現状	移行期	完成期
体系図			
構成員	〔四国広域協議会〕 ・国、県、大学、観光協会、民間など ・事務局：高知県	〔四国ジオパーク広域連絡協議会〕 ・国、県、各地域ジオパーク推進組織など ・事務局：県など	〔四国ジオパークネットワーク〕 ・国、県、各ジオパークなど ・事務局：民間、ＮＰＯ、第三セクター、ＬＬＰ（有限責任事業組合）など
	〔高知県ジオパーク連絡協議会〕 ・高知県、市町村 〔各地域〕 ・ジオパーク推進組織（民間、観光協会、商工会、自治体など）	〔各地域協議会〕 ・民間、観光協会、商工会、自治体など	〔ＪＧＮ加盟ジオパーク〕 ・民間、観光協会、商工会、自治体など
役割	〔四国広域協議会〕 ・調査事業への意見、四国のジオパークの在り方検討	〔四国ジオパーク広域連絡協議会〕 ・連絡調整、情報の収集・提供、事業支援	〔四国ジオパークネットワーク〕 ・連絡調整、情報の収集・提供、事業支援、広域計画検討、各ジオパークの統一性提示
	〔高知県ジオパーク連絡協議会〕 ・連絡調整、情報提供 〔各地域〕 ・事業の推進、普及啓発	〔各地域協議会〕 ・事業の推進、普及啓発	〔ＪＧＮ加盟ジオパーク〕 ・ジオツーリズムなど各事業の推進
予算	公的資金	公的資金 会費	運営収入、会費、寄付 運営資金

イ 今後の取り組み

現状～移行期

○エリア内での情報収集
　エリア内の団体の活動や人材を把握する
○組織の役割の検討
　ジオパークの運営組織の役割について検討する
○コンセプトの創出
　地域の特徴を活かしたジオパークのコンセプトを検討する
○連携の摸索
　エリア内の団体・他地域との連携について検討する
○運営費の検討
　ジオパークの運営に必要な費用について検討する
○運営組織の立ち上げ
　地域の各種団体が参画して運営組織を立ち上げる

移行期～完成期

○地域ジオパーク推進協議会の運営
　ＪＧＮ・ＧＧＮ加盟に向けて、地域ジオパーク推進協議会を運営する
○四国ジオパークネットワーク設立・運営
　広域連携による経営機能と財政基盤を強化して、経済的に自立した運営を行う

３ 各種計画

この項目では、四国内の各地域に誕生するジオパークとの広域連携をはかりながら、四国ジオパークのネットワーク化を見据えた、今後の取り組みを示す。

ア 人材育成・ジオツーリズム計画

今後の取り組み	
	現状～移行期 ○エリア内の活動への参加 　既存のイベントへ参加し、地域資源を把握する ○勉強会の開催 　地域資源について、より知識を深めるため勉強会を開催する ○ガイドの養成 　地質を含む地域資源の知識を深め、情報を発信する人材ガイドを養成する ○既存のガイドグループとの連携協力体制の確立 　既存のガイドグループと連携協力して、勉強会、ガイド養成、モニターツアーの開催、既存イベントでの実践などを行う ○モニターツアーの開催 　既存のイベントなどを利用してモニターツアーを実施し、養成した人材を活用する ○ガイドの組織化 　認定や組織のルールをつくり、安定的にサービスを提供できる体制をつくる ○商品化 　地域内の資源を使ったツアーを企画して旅行会社などに売り込む 移行期～完成期 ○ガイドの認定・登録制度の導入 　ガイドの認定・登録制度を導入して専門の知識を持ったガイドを育成し、コミュニティビジネスを創出する ○ジオツーリズムの共同企画 　広域周遊型のツアーを企画する（周遊型モデルコースについてはP17 参照） ○海外のＧＧＮ認定地域との交流 　海外ＧＧＮ認定地域との連携を軸とするＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）モデルの構築

参考事例

○ジオツーリズム関連

【事例１　施設を巡る無料バスの運行】

富山市では、市内にある７つの美術館・博物館の利用者が無料で乗れるミュージアムバス「ぐるりん」を運行している。

バスは駅を起点として、１時間おきに運行しているため、各館でじっくりと作品を堪能しつつミュージアム巡りが楽しめる。

出典：富山市ホームページ

【事例２　四国八十八箇所地質巡り】

現在、日本地質学会四国支部が四国八十八箇所周辺の地質露頭を調査してデータベース化している。2009 年中にホームページ公開予定。地質と遍路をつなぐジオツーリズムづくりの参考になる。

【事例３　日本地質 100 選】

日本の地質百選選定委員会が選定した日本の地質100選。カラー写真と説明付きで国内のジオサイト説明がわかりやすく載っておりジオツーリズムづくりの参考になる。

【事例４　石を観光資源として活用】

千葉県富津市では、地域資源の石（房州石の産地）が歴史的に芸術文化につながりが深いということに着目し、北海道から若手芸術家を誘致して石のモニュメントを作成。それを旧街道に配置し「石の刻道」と名付けて新たな観光資源を創出。その他房州石を使った石釜でピザを焼くなど、石を活用した観光地域づくりを進めている。

○人材育成・ガイド養成関連

【事例５　屋久島におけるガイドの登録・認定制度】

屋久島のガイドの登録・認定制度は、島の自然や文化などを保全しながら、そのすばらしさを伝え、さらに地域振興に貢献するという趣旨のもと創設された。制度の導入により、ガイド活動の幅がより広がり、質の高い「屋久島ガイド」の育成が図られた。平成 21 年 3 月現在、114 名の有料のガイドが登録している。

（参考 URL: http://www.yakushima-eco.com/index.html）

参考事例	
	【事例６　地質調査技士資格制度】 　地質調査の現場業務に従事する主任技術者の資格試験として制度化されたもので、現在有資格者は 14,000 人を超える。昭和 52 年からは現場管理者の登録に必要な資格として認められ、昭和 59 年からは 5 年ごとの登録更新制度を導入、資格者の継続教育を制度化している。平成 15 年度からは、地質調査分野の多様化に対応するため、3 部門に区分された資格となり専門性を増しており、人材育成・ガイド養成における活用が考えられる。 （参考 URL:http://www.zenchiren.or.jp/） **【事例７　九州ツーリズム大学開催】** 　ツーリズムに関心のある方は誰でも参加できる熊本県小国町の学校。農家民宿などのビジネスを考える人やツーリズム実践を学ぶ人など様々。10 期までに 1,500 人が終了。 （参考 URL:http://www.manabiyanosato.or.jp/tourism.php） **【事例８　教育プログラム】** ・四国４県での国際協力論の実施 　四国の４大学、四国 NGO ネットワーク、JICA 四国が協力して実施する市民参加事業。国際協力の現状や課題、体験談などを講義。国際協力に関する考え方やアプローチを理解する。そして自発的に行動できる学生の育成をめざす。 （参考 URL:http://www.jica.go.jp/shikoku/enterprise/shiminsanka/index.html） ・持続可能な開発のための教育（ESD） 　元気な地域と人を育てるために、体験や議論と実行、継続的な取り組みを求める ESD は、環境や貧困、平和など様々なテーマのもとに実施されている。ジオパークのめざす持続可能な社会づくりもこの一部に含まれる。 （参考 URL:http://www.esd-j.org/j/esd/esd.php）

○四国広域ジオツーリズムイメージ

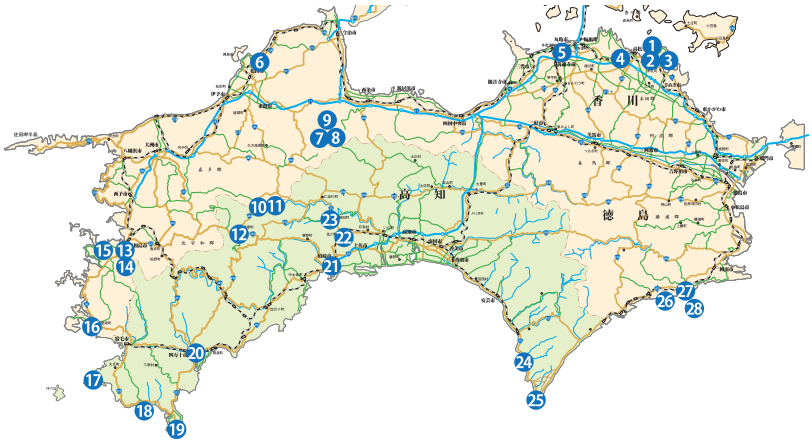
四国をまるごと楽しむジオツアー

ジオツーリズム モデルコース

地質の宝庫、四国を巡る

吉野川北岸沿いから佐田岬半島にかけて四国を東西に貫いている中央構造線。この構造線以北には中生層・古生層と、これを貫く火成岩が分布。構造線以南では大陸プレートに海洋プレートが潜り込むために、北から南にかけて地層が形成された順に付加されている。地質に動植物の生態系が影響を受け、さらに人々の暮らしや文化面においても、さまざまな特徴を持つようになった。そんな四国をぐるりと巡り、地質とその上に成り立つ自然や文化の違いを楽しもう。

1日目	JR高松駅 →(R11 車で20分)→ ①屋島 →(徒歩5分)→ ②新屋島水族館 →(車で15分)→ ③石の民俗資料館 → ④讃岐うどんづくり体験 →(高松自動車道 車で20分)→ ⑤第75番札所善通寺 →(高松・松山自動車道 車で120分)→ ⑥道後温泉（泊）
2日目	⑥道後温泉 →(R33 車で80分)→ ⑦面河山岳博物館 →(車で5分)→ ⑧面河渓 →(車で5分)→ ⑨石鎚スカイライン →(車で60分)→ ⑩四国カルスト → ⑪カルスト学習館 →(車で30分)→ ⑫雲の上のホテル（泊）
3日目	⑫雲の上のホテル →(R197 車で60分)→ ⑬宇和島城 →(車で5分)→ ⑭伊達博物館 →(車で15分)→ ⑮真珠の加工体験 →(車で50分)→ ⑯宇和島展望タワー →(R56・321 車で80分)→ ⑰大堂海岸・柏島 →(R321 車で30分)→ ⑱竜串・見残し海岸 →(車で40分)→ ⑲足摺温泉郷（泊）
4日目	⑲足摺温泉郷（泊） →(R321・56 車で40分)→ ⑳四万十川 →(R56 車で70分)→ ㉑道の駅かわうその里すさき →(R494 車で30分)→ ㉒佐川地質館 →(R33 車で20分)→ ㉓横倉山自然の森博物館 →(R33 車で60分)→ 高知市（泊）
5日目	高知市 →(R55 車で80分)→ ㉔吉良川の町並み →(R55 車で20分)→ ㉕室戸岬・乱礁遊歩道 →(R55 車で50分)→ ㉖南阿波サンライン →(車で25分)→ ㉗第23番札所薬王寺 →(車で5分)→ ㉘日和佐うみがめ博物館カレッタ →(車で5分)→ JR日和佐駅



イ 交通計画

今後の取り組み	現状～移行期 ○現状把握 　エリア外からのアクセスとエリア内の移動手段など現状を把握する ○独自の交通手段の検討 　エリア内での移動手段、移動ルートを検討する 移行期～完成期 ○独自の交通手段の導入 　移動ルートを確立し、独自の輸送手段を導入する
参考事例	**【事例１　広域アクセス情報】** 　北陸信越の便利な二次交通。駅やターミナルを選択すると、その付近の観光地とその交通情報が、また行きたい観光地をクリックすると、近くの交通結節点から観光地までの二次交通の情報が表示される。 （参考 URL：http://www.t-hrse.go.jp/nijikoutuu/） **【事例２　特徴ある交通手段】** ・セグウェイ 　セグウェイとは、アメリカで開発された電動立ち乗り二輪車で、その環境性能や新たな乗り物としての注目度の高さから、それ自体が地域への観光客の集客にもつながるため、地域観光資源の活性化への活用が期待されている。国内では、北海道「十勝千年の森」や長崎県「ハウステンボス」、静岡県「ふもとっぱら」が公認ガイドツアーを実施している。 （参考 URL：http://www.tmf.jp/index.shtml） ・馬車 　フランスでは、ガソリン高騰や環境問題などの交通問題に対処するため、馬を自動車代わりに活用する例が見られる。2007 年 11 月時点でフランス国内 70 以上の自治体で採用されている。その他、日本においても観光蔵馬車（福島県喜多方市）、辻馬車（大分県由布院町）、昇仙峡トテ馬車（山梨県甲府市）などで活用されている。 **【事例３　企業との連携によるバス停留所の整備】** ・MC Decaux（エムシードゥコー）社 　三菱商事とフランスの大手広告代理店の合弁会社として 2000 年に設立した MC Decaux は、2003 年に国土交通省・警察庁の規制緩和を受け、日本初の広告パネル付きバスシェルターを岡山市に導入、2009 年 1 月時点で全国 32 都市 950 基を導入している。都市景観に配慮したデザイン性や広告機能を持つ点や、照明設備による利用者の安心度の向上という点だけでなく、バス停留所の整備・維持費用が無償になることも利点としてあげられる。 （参考 URL：http://www.mcdecaux.co.jp/index.html）

ウ 広報・情報計画

今後の取り組み	現状～移行期 ○地域情報の現状把握 　エリア内でどのような情報を誰が発信しているのかを把握する ○情報発信の検討 　効果的な情報発信について検討する ○情報発信 　ジオパークに関連する地域の情報を戦略的に発信する 移行期～完成期 ○広域連携による情報発信 　四国のジオパークの一体的なブランドイメージを創出して、情報の一元化を図り、効果的・効率的に世界へ情報を発信する
参考事例	**○効果的な情報発信方法** **【事例１　都市部における情報発信（ふるさと情報プラザ）】** 　（財）地域活性化センターが運営するふるさと情報プラザでは、観光、物産、イベントなど様々な分野のパンフレットを都道府県市区町村別に展示・提供しており、月替わりでパンフレットの特集を行っている。また、地域の産品や観光のプロモーションを実施する地方自治体に、無料でスペース提供などの支援を行っている。 (参考 URL:http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/plaza/index.htm) **【事例２　姉妹都市などへの情報発信】** 　市町村の姉妹都市や友好都市に向けて情報を発信し、お互いに交流を活発化させている。加えて、地域出身の有名人にスポットを当て、他のゆかりのある地域と情報を交換することも考えられる。 **○先進ジオパークのホームページ** **【事例３　糸魚川ジオパークのホームページ】** 　主に糸魚川ジオパークの概要、ジオパークについて、ニュース、リンクといった内容。必要に応じて動画やパワーポイントでの説明あり。 　対応言語：日本語/英語 **【事例４　中国雲台山のホームページ】** 　景勝地の紹介、飲食店やホテルの情報、観光ルート、入場料などの内容で構成されている。景観を動画で楽しむことができる。 　対応言語：中国語/英語/日本語/韓国語

エ 管理計画

今後の取り組み	現状～移行期 ○地域資源の把握・調査 エリア内で整備や保護が必要な資源について調査する ○地域資源の保護方策の検討 地域資源の保護のための方法・体制などについて検討する ○ハード整備の検討 エリア内で必要なハード整備について検討する ○地域資源の保護 持続可能な維持管理体制を確立し、地域資源を保護する 移行期～完成期 ○広域連携による資源の保護・整備 四国のジオパークの資源を持続的に保護・活用するために必要な広域的なルールづくりや体制整備を行う
参考事例	**【事例１　西日本自然史系博物館ネットワーク】** 2000年から始まった環瀬戸内地域（中国・四国地方）自然史系博物館ネットワーク推進協議会のネットワークを活かし設立。自然を愛好し学びたいという市民の利用を目的とする、インターネット上の地図付きデータベース「いきものマップ」や、教育用キットの評価や自然環境や博物館活動に関するさまざまな共同事業を国や地方自治体、NPOなどと協力して展開。 （参考URL　http://www.naturemuseum.net/blog/） **【事例２　88クリーンウォーク】** 88クリーンウォーク四国実行委員会の主催で毎年8月8日に四国で一斉清掃を開催。定期開催により四国での一斉行事として定着しつつある。 （参考URL:http://www.skr.mlit.go.jp/road/88walk/index.html） **【事例３　カナウィンカ ジオパーク】** カナウィンカでは、認定ガイドにカフェの営業権を認め、サイトを保護しながらビジネスができる仕組みが導入され、環境と経済の両立を図っている。